

山形大学周辺における 暮らしの安心・安全に 関するアンケート 第1次報告書 2014年3月

国立大学法人山形大学人文学部「山形市における
安心・安全に関する学際的研究」プロジェクト

1. はじめに

昨年は、年末の大変お忙しい時期にもかかわらず、私どもが実施いたしました調査にご協力いただき、誠にありがとうございました。皆様のご理解により、貴重な調査結果を得ることができ、深く感謝しております。このたび、調査結果の第1次報告書を作成いたしましたのでご覧いただければ幸いです。これは主な質問項目について、基本的な集計結果を要約したものです。

2. 「山形大学周辺における暮らしの安心・安全に関するアンケート」について

本調査は、山形大学小白川キャンパス周辺に位置する小学校3校の保護者の方を対象に、2013年12月9日から16日にかけて実施しました。調査票の配布数は754部で、回答をお寄せいただいた方は649名でした(女性535名、男性104名、性別未記入10名、回収率86.1%)。回答者の平均年齢は40.5歳(27～59歳)、山形市での平均居住年数は22年(2ヶ月～58年)でした。小学校ごとの回答数は、第一小学校が174名、第五小学校が197名、第八小学校が278名でした。

3. 内容をご覧いただくにあたって

- (1) 各図表の数値は、とくにことわりがない限り、全回答数に対する割合です。ただし、小数点以下を四捨五入しているため、合計が100%にならないこともあります。
- (2) この報告書にある数値は速報値のため、今後、一部修正される可能性があります。他に引用される場合は、事前に私どもまでお知らせください。連絡先は最終ページをご覧ください。

4. 日常と災害に関する安心・安全感

4.1. 居住の経緯

保護者の方々が、どのような経緯で山形市に住むようになったかについてたずねました。図4-1によると、「生まれてからずっと山形市」「子どもの頃からずっと」「転出した後、戻った」を合わせて、山形市出身の方が48%となっています。

一方で、進学や就職、結婚、避難などをきっかけに山形市にいらした方が半数を占めています。

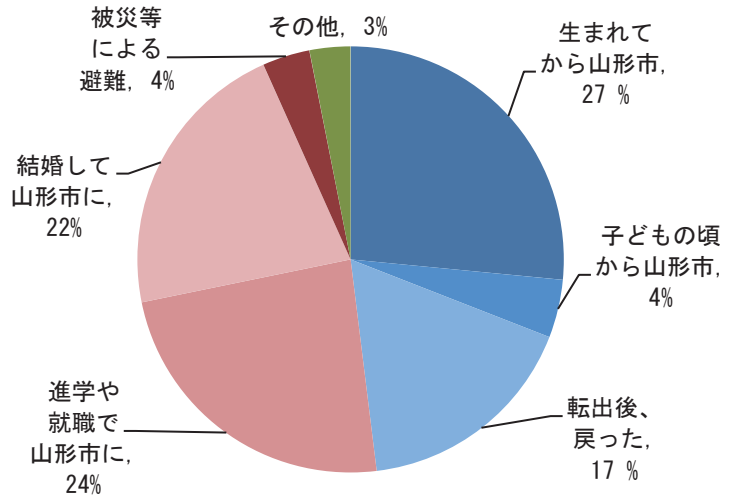


図4-1 居住の経緯

4.2. 暮らしの安心・安全感

地域における暮らしの安全について、交通事故、犯罪、災害の3つの側面からたずねました。「災害」と「犯罪」では「安心」「やや安心」の合計が「やや不安」「不安」の合計を上回っています。一方、「交通事故」では「やや不安」「不安」の方が多くなっています。

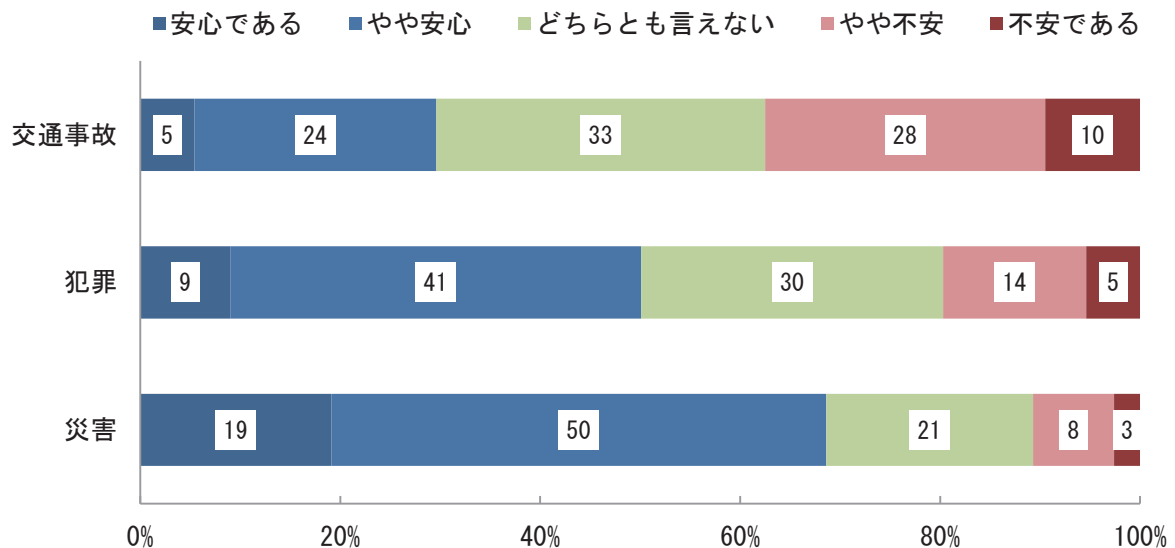


図4-2 暮らしの安心・安全感

4. 3. 災害時の人的ネットワーク

災害時に助けを求められることができる知人の数をたずねました（図 4-3）。5人以上と答えた方が山形市内では32%、徒歩圏では18%でした。一方で「いない」が山形市内で20%、徒歩圏で28%との回答になりました。助けを求められることができる親族については53%が山形市内にいと回答しており、親族を頼りにしている人が多いことが伺えます（図 4-4）。

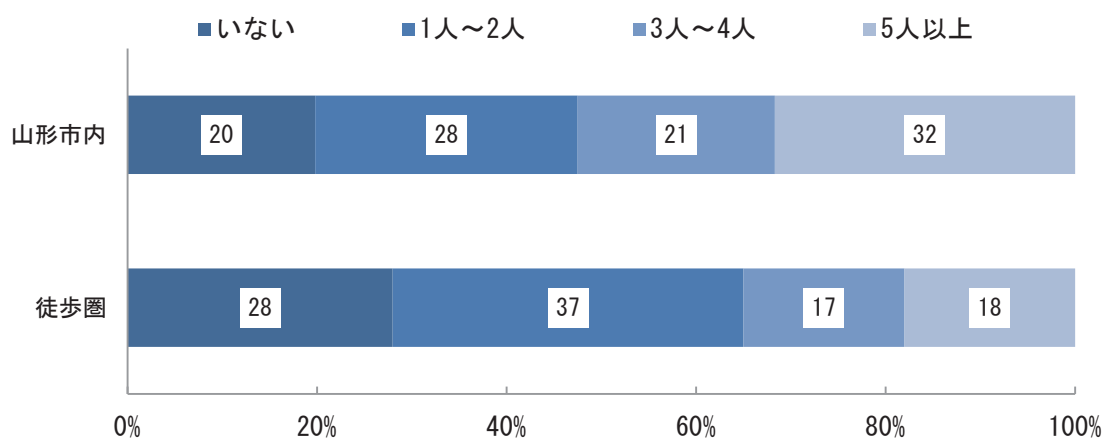


図 4-3 災害時に助けを求められることができる知人の数

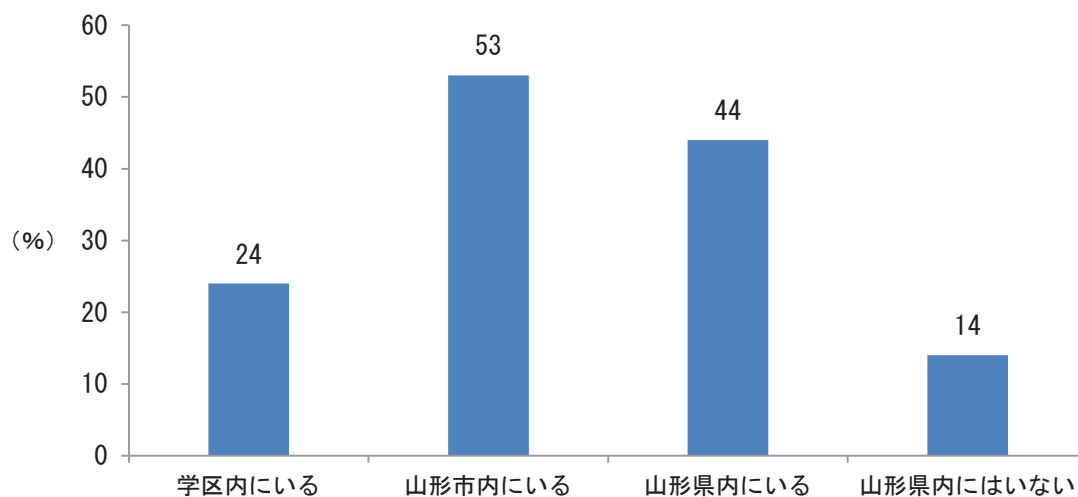


図 4-4 災害時に助けを求められることができる親戚

4. 4. 日常的な人的ネットワーク

日常的に子どもの世話をお願いできる知人の数をたずねました。山形市内にいないが半数以上、徒歩圏にはいないとの回答が6割に達しました。

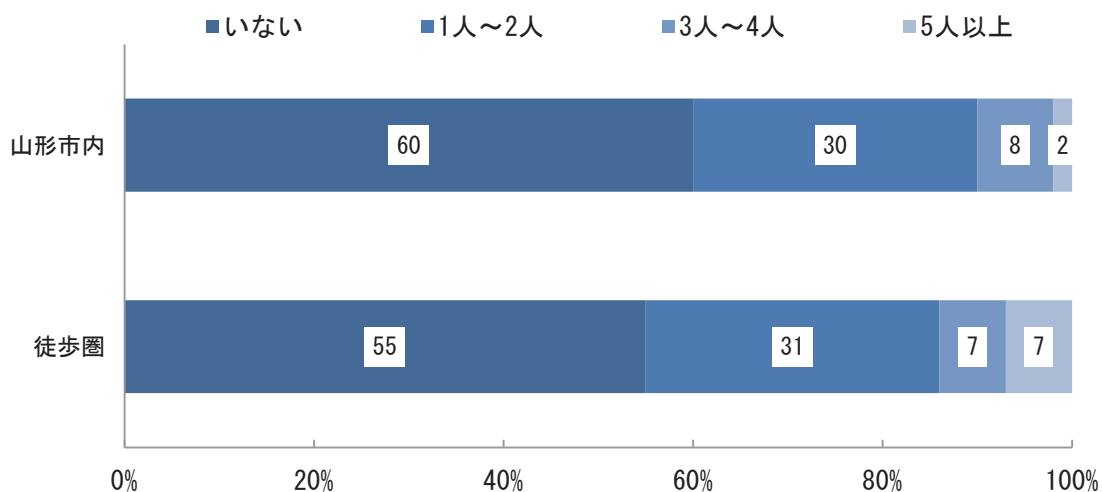


図 4-5 子どもの世話をお願いできる知人の数

4. 5. 災害時の助けや子どもの世話をお願いできる知人のニーズ

災害時の助けや日常的な子どもの世話をお願いできる知人がどれくらいほしいか聞きました。災害時の助けについては1割の方がたくさん欲しい、6割の方がある程度欲しいと答えています。

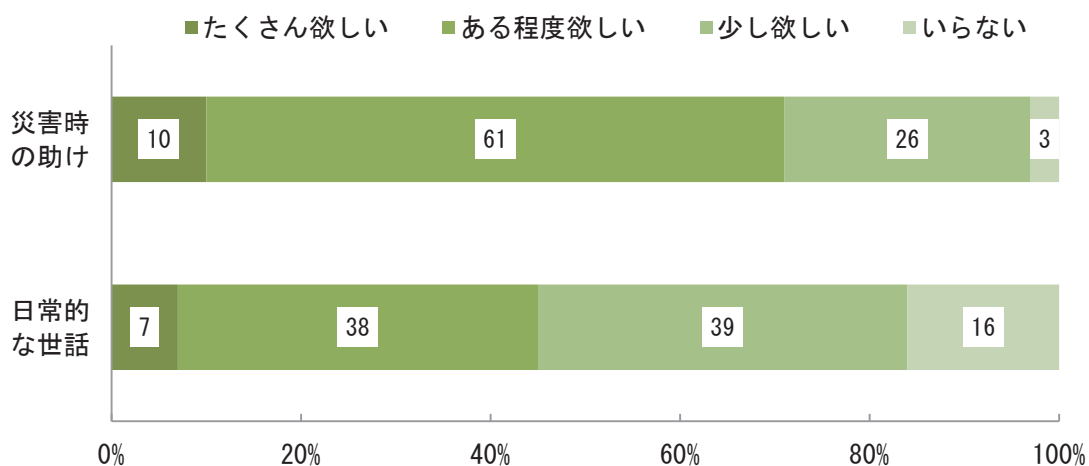


図 4-6 災害時の助けや日常的な世話を頼める知人がどれくらいほしいか

5. 防災情報の入手や災害時の避難

5.1. 公表されている災害情報の認知

ハザードマップは全世帯に配布されているので、およそ5割の回答者が内容を確認しています（図5-1）。一方、ホームページに掲載されている防災情報については1割にとどまっています（図5-2）。学区による差異は見られませんでした。居住地や学区によって想定される災害が異なるので、可能性のある災害をご家族で一度確認されることをお勧めします。

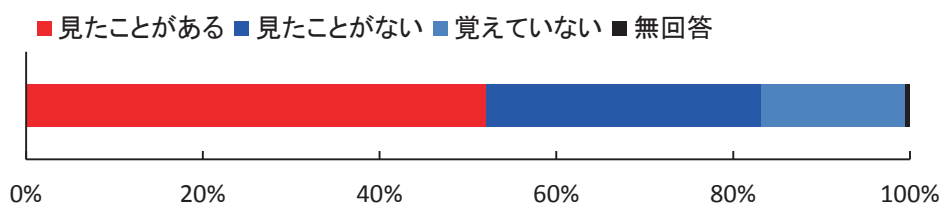


図5-1 ハザードマップの存在

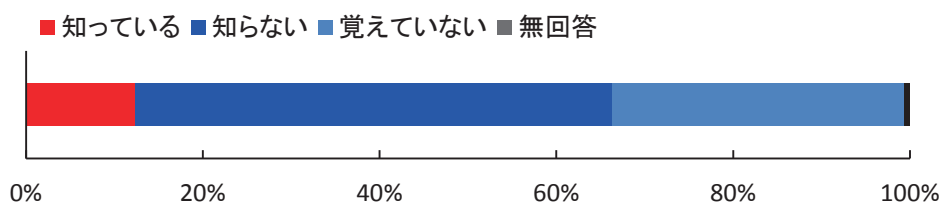


図5-2 山形市のホームページで公表されている防災情報

5.2. 災害情報の取得

地震情報に関しては5割以上、気象情報に関しては4割以上の回答者が「よく入手する」と答えていますが、避難場所情報に関しては1割以下にとどまります（図5-3～5-6）。避難場所はその都度確認するものではないと思いがちですが、災害の程度で一時避難、収容避難、広域避難と変わっていくので確認しておいてください。また、避難しない場合でも、給水場所等は決まっていますので知っておく必要があります。

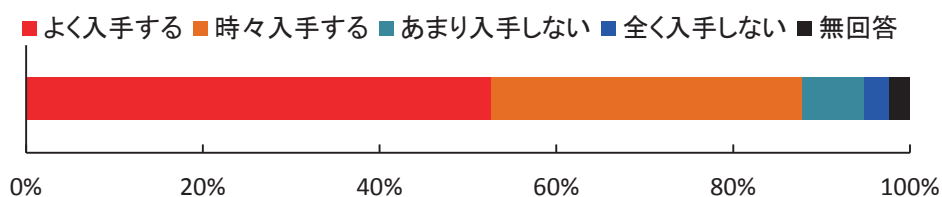


図5-3 地震情報

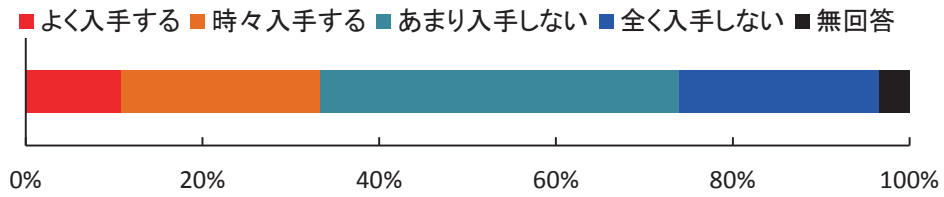


図 5-4 地震避難場所情報

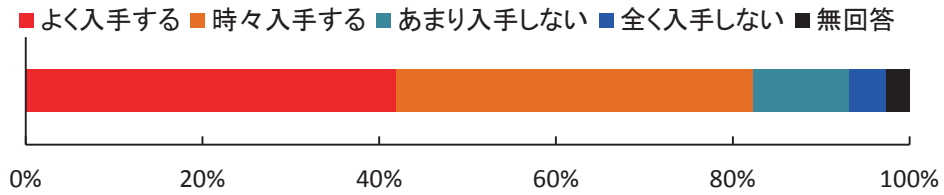


図 5-5 気象情報

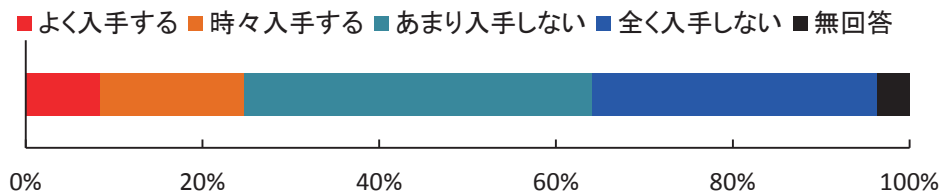


図 5-6 洪水避難場所情報

5. 3. 災害時の避難

6 割を超える回答者が周辺の小中学校および大学を具体的な避難場所として挙げており、1 割の方が公園を考えているようです (図 5-7)。おおよその考え方として、公園は一時避難場所、学校は収容避難場所として指定されています。災害の規模や被災の程度によって避難場所は変わってくるので、状況に応じた避難場所を確認しておく必要があります。図は提示しておりませんが、避難ルートに関しては、9 割以上の回答者が歩いて確認しています。避難ルートはまず一時避難場所へのルートを考えるべきですが、大規模災害時には、家族が離散してしまう可能性があるため集合する収容避難場所をあらかじめ決めておくことも必要です。自宅から避難場所までの距離に関しては、およそ 6 割の回答者が 500m 以内に避難場所を定めています (図 5-8)。災害時は障害物が増えるため、平常時よりも避難場所に到着するまでの時間が長くなります。距離も重要ですが、道幅の広い安全な道路も避難場所と同時に確認しておきましょう。ルート上の危険箇所については学区によって差異があるので、具体的な対処法を個々に相談しておく必要があります (図 5-9)。とくに、第八小学校区は国道 13 号線によって分断されており、2 カ所の高架アンダーが最大の危険箇所になります。これらの点を含めた災害時の相談を家族で行ったことがあると答えた方は半数程度でした (図 5-10)。子どもを交えた日常的な会話の中で、災害時の行動について相談しておくことをお勧めします。

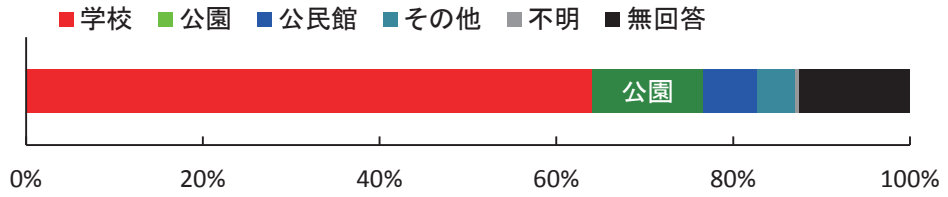


図 5-7 災害時の具体的な避難場所

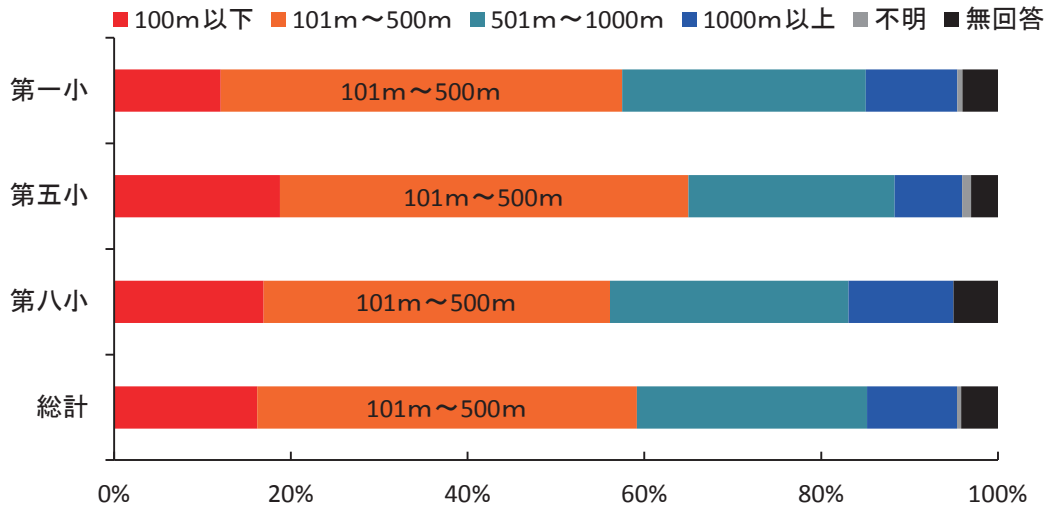


図 5-8 避難場所までの距離

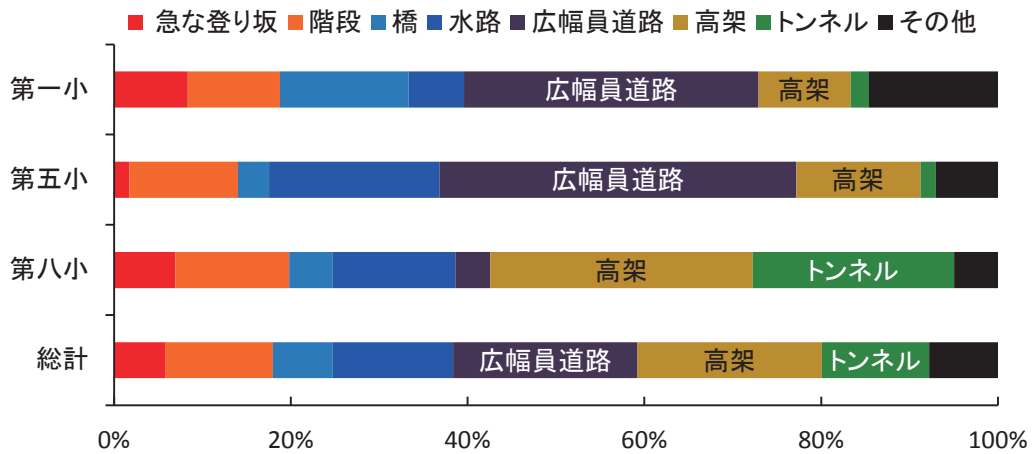


図 5-9 避難ルート上の地形・人工物の障害

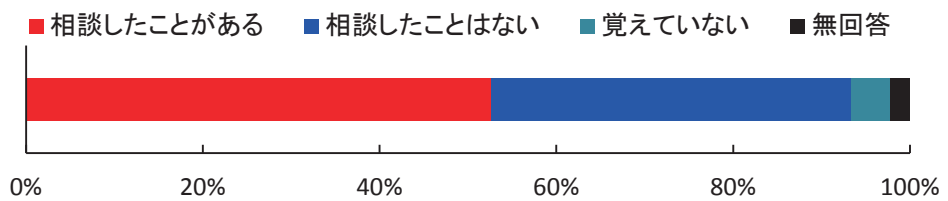


図 5-10 災害時の避難に関する家族内での相談

6. 山形大学や山大生との関わり

6.1. 山形大学小白川キャンパスへの印象

小白川キャンパスに対する印象をたずねました（図 6-1）。小白川キャンパスを必要と思う人や、地域にあってうれしいと感じる人は 6 割以上にのぼり、その存在意義は認められているようです。しかし、地域に貢献していると思う人や親しみを感じる人の割合は 5 割程度にとどまり、意見が分かれました。地域貢献というと、大学はとかく大きな事業に目を向けがちですが、地域の皆様の期待はもっと身近なところにもあるように思われます。

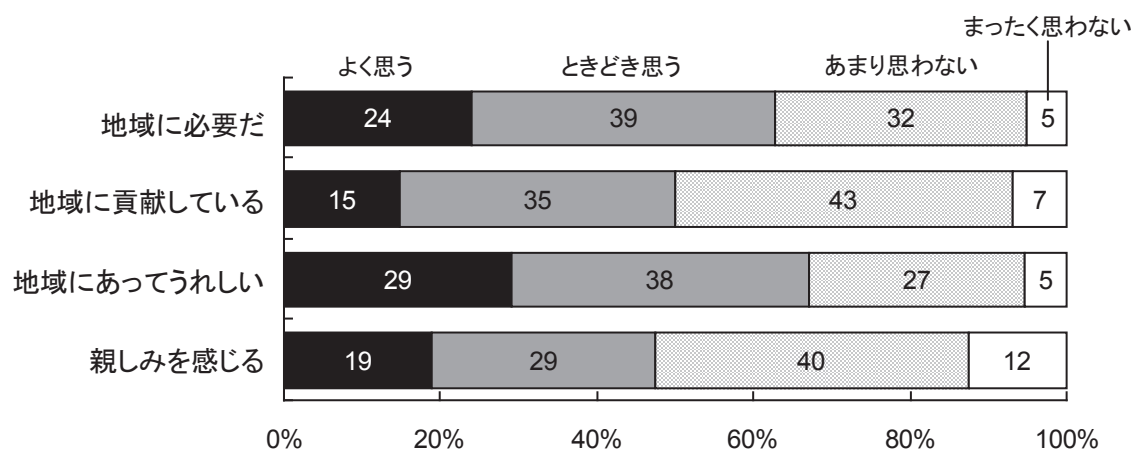


図 6-1 山形大学小白川キャンパスの印象

6.2. 山大生への印象

山大生に対する印象をたずねました（図 6-2）。5 割近くの人が山大生の規範意識の低下を、少なくともときどき感じると回答していました。一方で、山大生という若者が地域に多く住んでいることを肯定的に感じてくださっている人も多いようです。同様に、山大生にはもっと地域と関わりをもっとほしいという期待も強く感じられます。

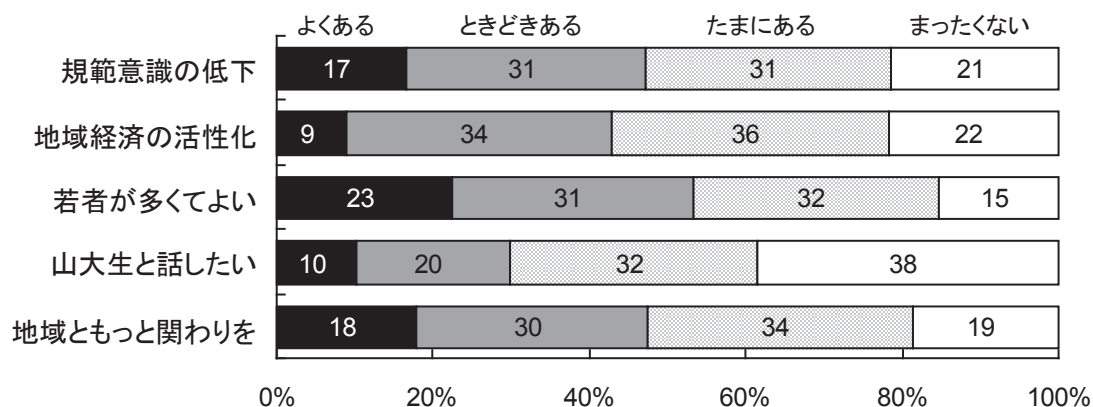


図 6-2 山大生への印象

6.3. 山大生の振る舞いに対する不安経験とトラブル懸念

山大生の振る舞いに対して危険や不安を感じた経験と、将来何らかのトラブルを経験するのではないかと懸念についてたずねました（図 6-3）。いずれも、小白川キャンパスとの距離が近い学区の保護者の方ほど、不安経験が多くなるとともに、将来のトラブル懸念も強まっています。

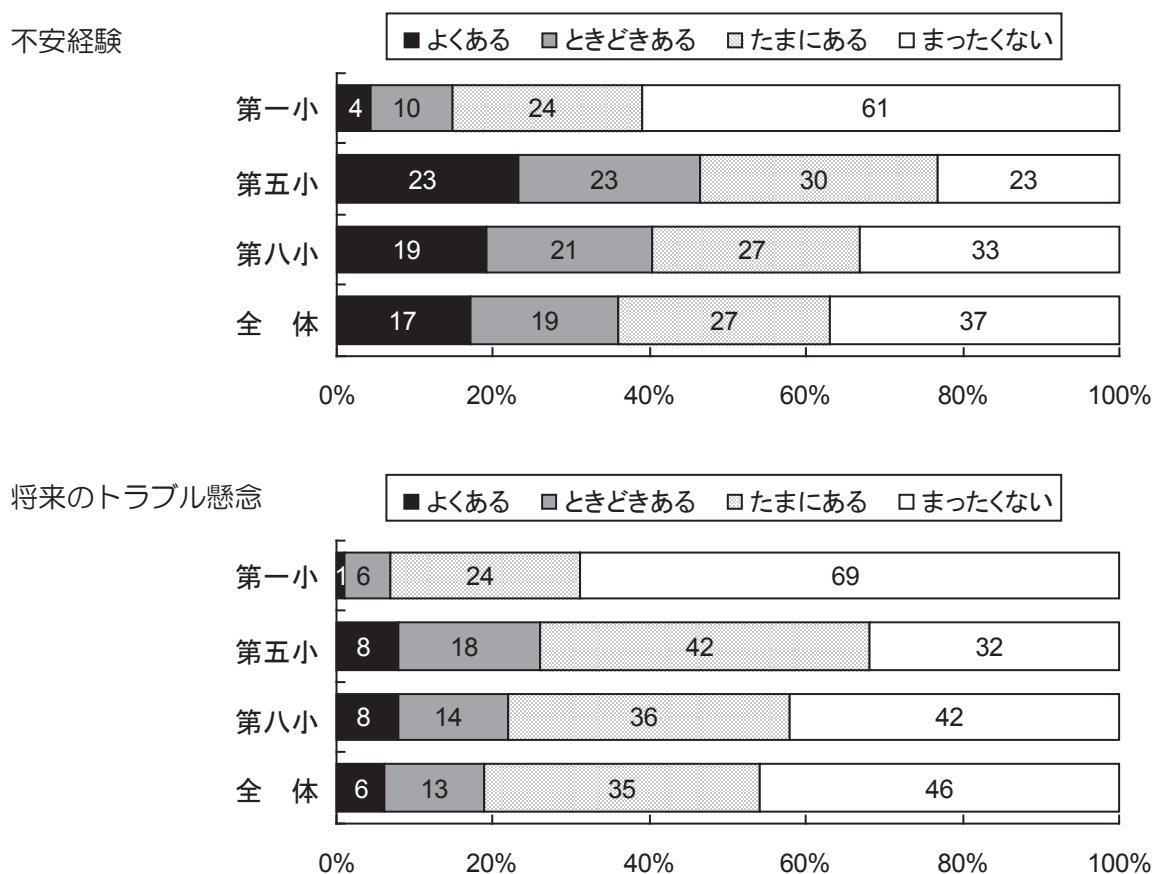


図 6-3 山大生の振る舞いに対する不安経験とトラブル懸念

次に、不安経験の具体的な内容とその対処について集計しました。報告された不安経験は、本調査の回答者 649 名のうち 314 件 (48%) ありました（次ページの表 6-1）。最も多かったのは、自転車の運転に関するもので、スピードの出し過ぎ、右側通行、突然の進路変更や横断、一時停止無視、並進など、基本的な運転ルールの無理解に対する厳しいご意見が多数寄せられました。

次に多かったのは騒音で、とくに夜間における住宅付近での立ち話や飲み会の帰り道での大声を指摘する人が多く、寝ているお子さんが目を覚ましてしまうという問題が生じていることもわかりました。道路の歩き方に関しては、騒音と重複する部分もありましたが、歩道や車道をふさぐように広がって歩く行為が問題視されていました。マナーに関しては、

スーパーなどの店内での態度や戸外での喫煙について、複数の回答がありました。また、無断駐車では、とくに山大グラウンド南側の路上駐車を指摘する回答が多くみられました。この道路は小学校の通学路と重なっており、改善に向けた働きかけが必要です。

表 6-2 は、表 6-1 で示したような不安を経験したときに、回答者の方がそれにどう対処したかについての集計です。何もしなかったという対応が最も多くみられましたが、実際のトラブルまでいかない不安を経験した際の対処をおたずねしたので、この回答が多いのは自然かもしれません。また、「その他」として、複数の保護者の方がお子さんに自転車には注意するよう話したと回答していました。表 6-1 の結果と合わせて考えると、学生には自らの行為が不安視されていることへの自覚を促すとともに、学生自身が子どもを事故に巻き込む側になりうるという認識を強くもたせることが必要と考えられます。

表 6-1 不安経験の内容（複数回答あり） （表中の数値は件数）

	第一小 (48 件)	第五小 (125 件)	第八小 (141 件)	全体 (314 件)
自転車の危険運転	27 (56%)	92 (74%)	99 (70%)	218 (69%)
騒音（道端、アパート、店先、公園など）	11 (23%)	25 (20%)	33 (23%)	69 (22%)
道路の歩き方（広がって歩くなど）	11 (23%)	14 (11%)	29 (21%)	54 (17%)
マナー（店内での態度、喫煙など）	2 (4%)	6 (5%)	12 (9%)	20 (6%)
無断駐車や路上駐車	1 (2%)	8 (6%)	8 (6%)	17 (5%)
ごみの出しのルール違反やポイ捨て	1 (2%)	6 (5%)	3 (2%)	10 (3%)
その他（公園利用 [花火や占有]、自動車やバイクの運転、マスコミ報道など）	5 (10%)	8 (6%)	7 (5%)	20 (6%)

注：山大生によるものかどうか明確でない事例も集計に含めています。

表 6-2 不安経験時の対処（複数回答あり） （表中の数値は件数）

	第一小 (48 件)	第五小 (124 件)	第八小 (140 件)	全体 (312 件)
とくに何もしなかった	41 (85%)	91 (73%)	118 (84%)	250 (80%)
本人に直接話した	3 (6%)	12 (10%)	12 (9%)	27 (9%)
警察に連絡した	3 (6%)	8 (7%)	8 (6%)	19 (6%)
山形大学に連絡した	0	2 (2%)	3 (2%)	5 (2%)
小学校に連絡した	0	3 (2%)	0	3 (1%)
その他	4 (8%)	11 (9%)	9 (6%)	24 (8%)

注：記入もれなどにより、第五小と第八小の回答数は表 6-1 のそれと一致しません。

7. 提言

7.1. 日常と災害に関する安心・安全感

今回調査した3つの小学校の学区について、多くの方が不安に感じておられるのは交通事故のことでした。交通量が多い幹線道路や道幅が狭い通学路などがあり、子どもたちも、地域の大人たちも、交通ルールを守り、お互いに配慮しながら道路を利用する必要があります。

災害時に助けを求められることができる知人の数は、徒歩圏にいないが2割、1人～2人が28%と少ない人が多いことがわかりました。一方で災害時に頼れる親戚が市内にいる人は徒歩圏で24%、市内で53%と、親族ネットワークを頼りにしていることがわかりました。ただし9割以上の方が、知人がほしいと回答していること、また市内や県内に親戚がいない家庭もあることから、地域防災・減災の実現のためには、親族以外のネットワークの構築が求められています。

また日常的に子どもの世話をお願いできる知人についても、「山形市内にいない」とした人が55%に達している一方、「ある程度ほしい」「少しほしい」も含め「ほしい」との回答が8割に達しています。日常的な関係性の構築が、地域生活の安心につながるとともに、災害時にも大きな力を発揮することが予想されます。学区単位での家族間の共助のしくみづくりが望まれます。

7.2. 防災情報の入手や災害時の避難

山形は災害の少ない土地だと思います。とくに、今回の調査の対象になった第一、第五、第八小学校区は、広域洪水に見舞われるような土地ではなく、震度に関しても比較的強固な土地といえます。そのため、全体として災害認知度が低く、防災や避難に関する意識が薄い傾向が観察されます。しかしながら、東日本大震災で経験したように、大災害は想定していない規模で突然発生します。山形市のホームページはかなり充実している方だと思います。内容を地域や家庭でよく確認し、災害時の行動を話し合っておいてください。

一方、子どもがいる世帯を対象にした調査だけに、日常的な安心・安全に関する意識は高いようです。危険箇所の確認は各家庭で行っているため、それを無くす活動や回避する方法を地域や学校で進めていく必要があります。交通事故の発生箇所等の情報は警察が情報を提供しているため、通学路の見直しや見回りの強化などに行政からの指導や情報提供を受けることも効果的と思われる。

7.3. 山形大学や山大生との関わり

早急に取り組むべき問題のひとつとして、小白川キャンパス周辺の自転車利用について、その安全性を高めることがあげられます。そのためには、第一に、自転車利用者に運転ルールを正しく理解させることが不可欠です。自転車の危険運転に関する皆様の不安の声を

大学内で共有し、大学生といえども改めて安全教育を行っていく必要があります。この点に関しては、来年度（平成 26 年度）からのささやかな取り組みではありますが、すべての新入生が入学後すぐに履修する「スタートアップセミナー」において、自転車の危険運転などについて考えさせるワークショップが導入される予定です。第二に、とくに小白川キャンパス周辺では、自転車利用者個人にすべてを負わせるのではなく、安全な通行環境の整備も必要です。例えば、山大正門前の通りの「自転車押し歩きマナーロード」化が実現できれば、環境改善につながります。

もうひとつ気になるのは、小学校の通学路にもなっている山大グラウンド南側の路上駐車です。駐車車両の横を通行する自動車と歩行者が接触する危険も増大しています。大学内での情報共有と改善に向けた取り組みがすぐに必要です。

8. おわりに

私どもは、皆様からお寄せいただいた回答をさらに詳しく分析することを通して、安心して暮らせるとともに、安全な地域社会のあり方について、今後も考察と働きかけを続けてまいります。今後の研究の進展については、山形大学人文学部ウェブサイトですらいつでもお知らせする予定です。

今回の報告書や調査について、ご意見やご質問、ご感想などがありましたら、以下までお寄せください。

連絡先 〒990-8560 山形市小白川町 1-4-12
山形大学人文学部 福野光輝
電話：023 (628) 4267
Email: fukuno@human.kj.yamagata-u.ac.jp
人文学部ウェブサイト：<http://www-h.yamagata-u.ac.jp/>

平成 25 年度山形大学人文学部 「山形市における安心・安全に関する学際的研究」プロジェクト

【代表】 福野光輝（山形大学人文学部准教授，心理学）
渡邊洋一（山形大学人文学部教授，心理学）
山田浩久（山形大学人文学部教授，地理学）
本多 薫（山形大学人文学部教授，情報科学）
阿部晃士（山形大学人文学部准教授，社会学）
山根純佳（山形大学人文学部准教授，社会学）

本調査の実施にあたり、平成 25 年度山形大学人文学部研究活動支援（プロジェクト研究）による助成を受けました。